

箕輪町指定史跡

羽場の森古墳第2号

平成10・11年度整備復元事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書

2000年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

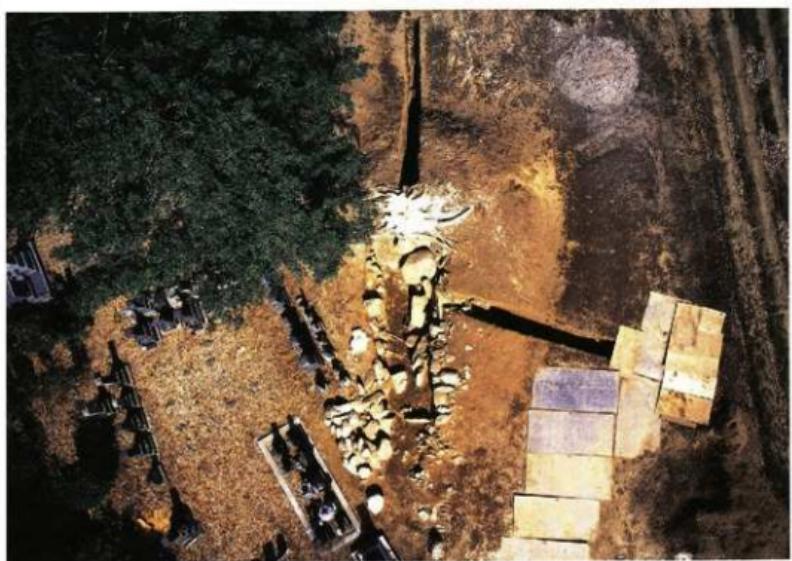
箕輪町指定史跡

羽場の森古墳第2号

平成10・11年度整備復元事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書

2000年

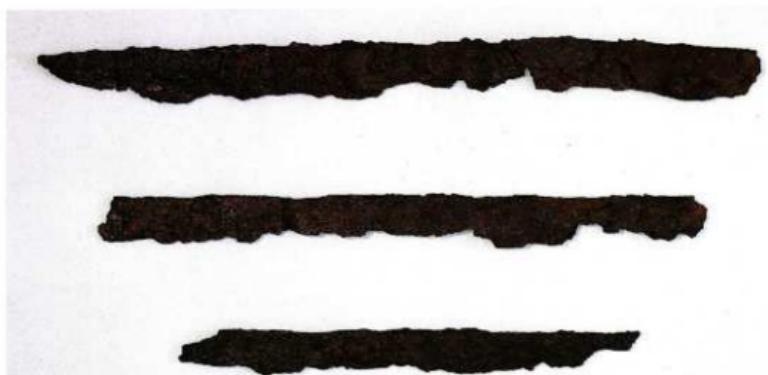
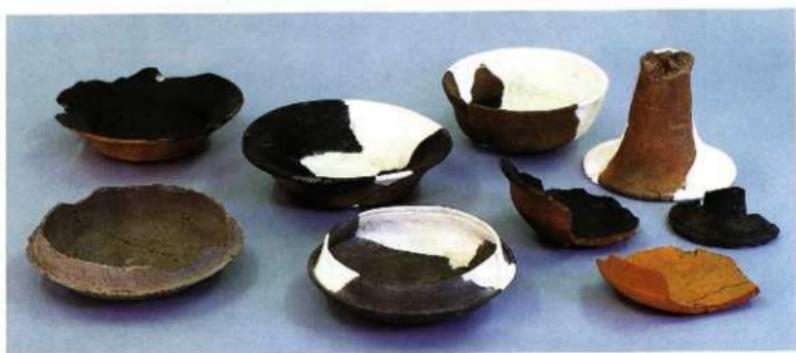
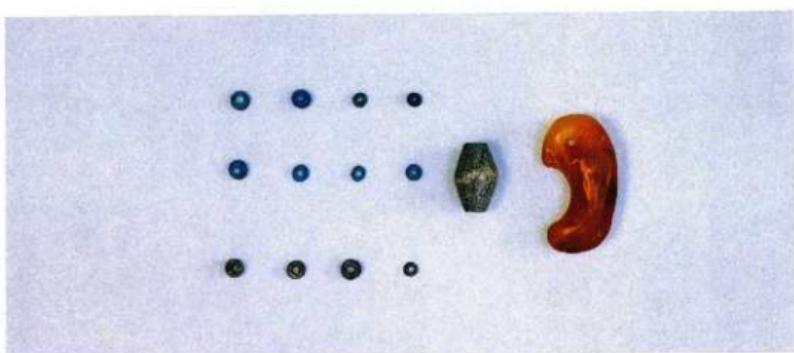
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会



古墳 上空より



羽場の森古墳第2号室復元後



出土遗物

序

箕輪町は、伊那谷の北部、歴史の古い落原の里にあり、東西に聳える山々と、町の中央を南下する天竜川、そして河岸段丘に代表される複雑な地形が織りなす、水と緑の自然あふれる美しい所であります。ここには、遙か先史の頃より、河川や湧水などの水辺に人々が暮らしあはじめ、そして、先人達の日々の努力の積み重ねによって、今日の箕輪町へと発展してきました。

その証として、私たちの町には、輝かしい歴史と文化を今に伝える多くの文化遺産があります。その中には、日頃私たちの目に触れる事の少ない、遺跡、古墳などの埋蔵文化財があります。

今回、調査対象となりました羽場の森古墳は、町東部の長岡地籍に位置し、3基から構成される古墳群として今日に残る極めて貴重な古墳であり、昭和52年に町史跡に指定されています。しかし、その中でも第2号墳は、今日に至る経過の中でかなり破損してきており、このままではいずれ消滅してしまう恐れがあることから、早急に何らかの保護処置を施す必要が出てきました。

この古墳を保護するにあたり、町文化財保護審議会からの進言を受け、土地所有者並びに地域の皆様のご理解とご協力により、史跡公園整備事業が行われることになりました。事業に先立ちまして、古墳の規模や構造等の内容を確認するために、必要最小限度の発掘調査を実施し、学術的に町の歴史を知る上で貴重な成果上げることができました。

内容につきましては、本書の中で詳細に記しております。多くの皆さんに広く活用され、郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の事業に際しまして、ご理解ご協力をいただきました多くの皆様方に、心から感謝申し上げまして、本書の刊行のことばといたします。

箕輪町教育委員会

教育長 大槻 武治

例　　言

1. 本書は平成10・11年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1,150番地他に所在する、羽場の森古墳第2号の発掘調査報告書である。
2. 本調査は箕輪町文化財保護審議会が指導・監修し、箕輪町教育委員会が行ったものである。
3. 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。

遺物の洗浄・注記	——	井沢はずき	福沢 幸一	宮下 容子
遺物の接合・復元	——	福沢 幸一	宮下 容子	
遺構図の整理・トレース	——	井沢はずき	根橋とし子	
遺物の実測・トレース	——	根橋とし子	宮下 容子	
挿　図　作　成	——	根橋とし子		
写真撮影・図版作成	——	赤松 茂	根橋とし子	
4. 本書の執筆は、赤松 茂・根橋とし子が行った。
5. 本書の編集は、赤松 茂・根橋とし子が行った。
6. 調査地の空観写真撮影は、拂ジャステックに委託した。
7. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。
8. 調査及び本書の作成にあたり、下記の機関からご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

機関—長岡区、箕輪東小学校、
個人—柴 曾平、柴 財埜、柴 貴、柴 朝之、中林 喬、池上賢司

凡　　例

1. 遺構実測図は、以下の縮尺に統一した。
平面図—1:50・1:100・1:200 土層断面図—1:50
2. 遺物の実測図及び拓影図は、以下の縮尺に統一した。
土器実測図—1:4 金属器実測図—1:2・2:3・1:4 玉類実測図—1:1
3. 土層及び土器の色調は、「新版標準土色帖」を用いて記してある。
4. 土器実測図における土器の接合状況は、観察できるもののみ断面に表示してある。
5. 遺構実測図中におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。
 = 磁断面 ● = 土器 ■ = 金属器 ▲ = 骨 = 落下石断面 = 立ち木
6. 土器実測図中におけるスクリーントーン表示は、以下のものを表す。
 = 須恵器断面 = 土器内面黒色処理
7. 出土土器観察表の法量は、上から「口径・底径・器高」の順に記し、単位はセンチメートル(cm)である。また、現存する数値は「()」で、「-」は計測不能を表している。
8. 図版の出土遺物の数字は、挿図における遺物番号を表す。

本文目次

カラー図版

序

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査概要	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
第1節 地形と地質	4
第2節 歴史環境	6
第Ⅲ章 調査結果	8
第1節 調査方法と経過	8
第2節 墳丘	9
第3節 石室	13
第4節 出土遺物	15
第Ⅳ章 まとめ	22
第1節 調査の成果	22
第2節 古墳の整備と保護	23

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 地形観察図	5
第3図 周辺遺跡分布図	7
第4図 調査範囲図	8
第5図 トレンチ・土層断面図	10
第6図 古墳墳丘平面図・断面図・トレンチ設定図	11・12
第7図 石室展開図・遺物出土状況図	14
第8図 出土土器実測図	15
第9図 出土玉類実測図	17
第10図 出土鉄器（直刀）実測図	18
第11図 出土鉄器（轡）実測図	19
第12図 出土鉄器（鉄鎌・釘）、金属器実測図	20
第13図 古墳復元図	23

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6
第2表 出土土器観察表	16
第3表 出土玉類観察表	17
第4表 出土鉄器（直刀）観察表	20
第5表 出土鉄器（轡）観察表	21
第6表 出土鉄器（鉄鎌）観察表	21
第7表 その他出土金属器観察表	21

図版目次

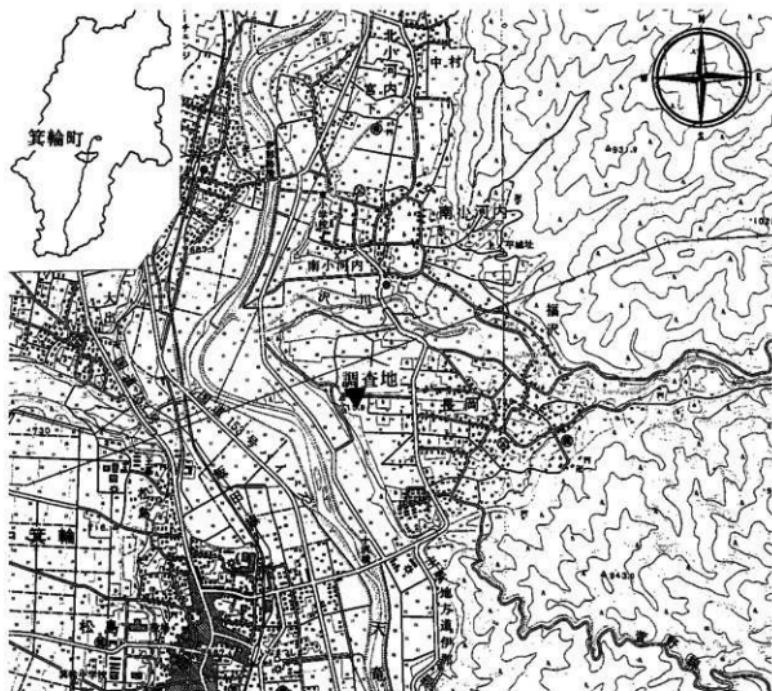
図版1 調査前（東方より）、古墳上空より
図版2 調査地近景（東方より）、石室（南方より）
図版3 1 トレンチ断面、3 トレンチ断面、4 トレンチ断面
図版4 2 トレンチ断面石室裏込め石出土状況、4 トレンチ石室裏込め石出土状況、鉄鎌出土状況
図版5 出土遺物 土器・玉類
図版6 出土鉄器（直刀） 出土鉄器（轡）
図版7 出土鉄器（鉄鎌） 箕輪東小学校児童の見学会

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

箕輪町長岡地籍は、沢川の押し出しによって形成された小扇状地の左岸に位置し、その限られた範囲内において町内で確認されている27基の内8基の古墳が現存する。また、以前には10数基以上もの古墳があったといわれ、上伊那郡下において古墳時代後期の群集墳の形成を見ることができる数少ないものとして知られている。俗に長岡古墳群と呼ばれ、扇頂部から扇尖部にかけての緩やかな傾斜地に沿って立地するグループと、羽場の森古墳に代表される扇端部に沿って平地上に立地するグループとに分けることができる。

羽場の森古墳は、扇端部に沿って僅か300mの範囲で3基が並び、1号及び3号古墳は比較的保存状態がよく原形をとどめている。今回整備復元事業の対象となった2号古墳は、昭和28年ごろの土地改良の際に破壊されたと伝えられ、現状でも墳丘の一部が崩れ石室が露出した状況であり、更なる崩壊の危機に瀕していた。



第1図 調査位置図 (1:25,000)

地元長岡区では昭和39年に、古墳を破壊から守るために古墳の測量等の調査を実施し、「長岡古墳群の調査書」をまとめ、町に陳情書として提出している。町では、昭和52年度に1～3号古墳を一括で町史跡として指定をしたもの、2号古墳における整備等の保護処置は当時からの懸案であった。

この経過を踏まえ、平成9年度に町文化財保護審議会において古墳の現状を観察し、審議の結果早期整備が必要との報告が出され、それを受けた町教育委員会との間で整備に向けた具体的な協議が行われた。これにより、古墳本体の復元整備とともに、史跡としての管理運営のために、隣接する用地の一部公有地化を盛り込んだ「羽場の森古墳第2号史跡整備事業」が計画され、古墳の内容確認を目的とした発掘調査を含む事業実施の運びとなった。調査と整備復元は平成10年度に実施し、平成11年度に整理作業を経て本書の刊行に至った。

第2節 調査概要

- 1 遺跡名 羽場の森古墳第2号
- 2 所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪1,150番地
- 3 調査位置 東経137°59'50" 北緯35°55'20" 標高715.5m
- 4 発掘調査期間 平成10年12月1日～平成11年3月17日
- 5 整理期間 平成11年12月1日～平成12年3月25日
- 6 事務局 教育長 藤沢健太郎（平成12年1月離任）
教育長 大槻 武治（平成12年1月着任）
参事 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館館長）
主幹 唐沢喜美子（平成11年3月31日まで）
主幹 原 省吾（平成11年4月より）
副主幹 赤松 茂（同館学芸員）
主査 柴 秀毅（同館学芸員）
- 7 調査団 団長 藤沢健太郎（平成12年1月離任）
団長 大槻 武治（平成12年1月着任）
副団長 柴 登巳夫
担当者 赤松 茂
調査員 根橋とし子 福沢 幸一
団員 井沢はずき 泉沢徳三郎 市川 俊男 伊藤 裕康
井上 武雄 井上 隆次 遠藤 茂 大槻 茂範
大槻 泰人 片桐 勇 桑原 篤 後藤 主計
小松 峰人 田中 忠男 藤沢 具明 伯耆原 正
洞口 秋人 堀 五百治 堀内 昭三 松田 貢一
宮下 容子 向山幸次郎 山田 武志

第3節 調査日誌

- 12月10日（木） 仏事を行い調査を開始する。墳丘及び石室内の雑草とごみの除去を行う。
- 12月16日（水） 25cmコンクで古墳の地形測量を始める。
- 12月17日（木） 古墳の地形測量をする。墳丘から周溝にトレンチを4本設定する。
- 12月18日（金） 古墳の地形測量の続きをを行い、終了する。4本のトレンチの掘り下げを始める。
- 12月21日（月） 4本のトレンチの掘り下げをする。周溝が2・3・4トレンチに確認される。石室の調査に入る。
- 12月22日（火） 石室内の調査を続ける。淡道はカクランが激しい。
- 12月24日（木） 淡道より高杯が出土する。墳丘の裏込め石を検出する。
- 12月25日（金） 全体写真を撮る。トレンチの掘り下げを行い、周溝の精査を行う。
- 12月28日（月） 道具の整理をする。
- 1月 7 日（木） トレンチの断面測量を行う。
- 1月 8 日（金） 周溝の平面測量を行う。トレンチの土層注記を行う。
- 1月11日（月）・12日（火） 室内作業。
- 1月13日（水） トレンチの写真を撮る。トレンチ断面の土層注記を行う。辰野町の発掘関係者が訪れる。
- 1月14日（木） トレンチ断面の土層注記を終える。石室内の掘り下げを進め、鉄錐が検出される。
- 1月18日（月） 石室内をA区～F区に分けて掘り下げる。鉄錐や土器片が検出される。
- 1月19日（火） 石室の掘り下げを行う。E区より勾玉が検出される。石室の断面測量を行う。
- 2月 4 日（水） 文化財保護審議会が古墳調査の進行状況を観察する。
- 2月26日（金）～3月 4 日（木） 木の伐採作業を行う。
- 3月 4 日（木） 笠輪東小学校児童の学習会を行う。
- 3月12日（金） 石室東壁の石積みの測量を行う。
- 3月13日（土） 長岡区民を対象とする現地説明会を行う。石室の平面測量を行う。
- 3月17日（水） 石室の平面測量が終わり、すべての調査を終了する。
- 3月22日（月）～31日（水） 古墳復元及び周辺整備を行う。



第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70kmにも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。箕輪町を含む伊那盆地は、天竜川の低地帯から両アルプスの山頂に至って、大起伏地形となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10km幅にそれが集中する、きわめて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

以前は、伊那谷の特徴を表すとして注目されていた段丘状の地形が配列している様子は、天竜川の侵食による河岸段丘と考えられていたが、現在はそれが中央・両アルプスの上昇に伴う地殻変動の結果、断層によって造り出された断層崖である、ということが研究によってわかってきてている。各地でこうした断層の調査が行われ、伊那谷の地形の歴史は以前より詳しく把握されつつある。そのようなことから今後箕輪町においても、さらに詳しい調査が望まれるところである。

今回復元整備事業が行われた羽場の森古墳第2号のある長岡地区は、いわゆる「竜東」とよばれ、天竜川の東側にある。

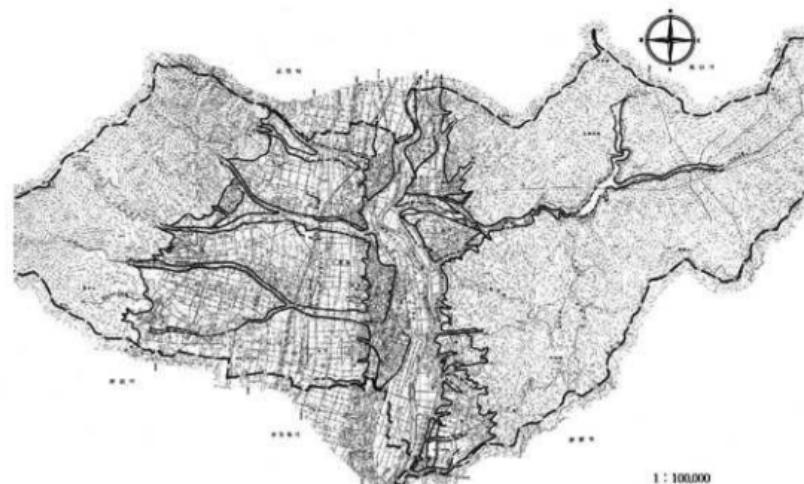
箕輪町の中では、複合扇状地によって形成された広大で平坦な地形が続く竜西側に比べ、竜東側は小規模の山が天竜川の近くにせまり変化に富んだ地形となっている。

しかしながら、長岡地区に限り、緩傾斜の比較的広い地形が続いている。これは、長岡地区が、沢川の造り出した扇状地の南側（左岸側）にあたるためである。長岡地区の東側の山麓には小規模の扇状地の形成が認められるが、基本的に長岡地区の地形を造り出している要因は沢川扇状地である。

現在では、耕作や造成に伴いわかりにくいか、以前は、うねりをもなながら西方へ緩やかに傾斜する、



上空より遺跡地を望む（調査前）



第2図 地形観察図 (1:100,000)

というこの扇状地の特徴がかなり明瞭に現われていたと思われる。そして古墳の位置する場所は、沢川扇状地の扇端部にあたるため、古墳造築当時より天竜川を始め、遠方までを見渡せる絶好の場所であったと思われる。

地質においては箕輪町はいわゆる領家変成帯に属し、竜東・竜西どちらの側にも領家変成岩類の分布が認められるが、地形と同じように基盤岩の質も竜東側と竜西側では異なっている。

竜西側は片状ホルンヘルスや一部チャートも分布するが、複合扇状地の発達に伴い、広く扇状地の堆積物で覆われている。それに対し竜東側では、高速花崗岩と呼ばれる花崗岩や粘板岩を中心に扇状地堆積物や結晶質石灰岩、石英玢岩などが分布している。

こうした中で、今回復元整備した羽場の森2号古墳のある長岡地区は沢川扇状地によって運ばれた扇状地堆積物ではほぼ占められている。

また伊那谷を覆っている被覆層は竜西側では厚く、基盤岩の露出は少ないので比べ、竜東側の被覆層は比較的浅く、断片的である。そのため、天竜川の支流の谷沿いには基盤岩が露出し、天竜川の合流点まで続いている。

箕輪町でも県史跡の福与城跡北の南沢や、長岡扇状地を造り出した沢川の谷沿いなどに基盤岩の露頭が何ヵ所か見られる。

引用・参考文献

- | | | |
|-------------|-----------------------|----------------|
| 箕輪町誌編纂刊行委員会 | 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編 | 1976. 9.30 |
| 松島信幸 | 伊那谷の造地形史伊那谷の活断層と第四期地質 | 1995. 3.31 |
| 益富壽之助 | 原色岩石図鑑(全改訂新版) | 1992. 8.31 第3刷 |

第2節 歴史環境

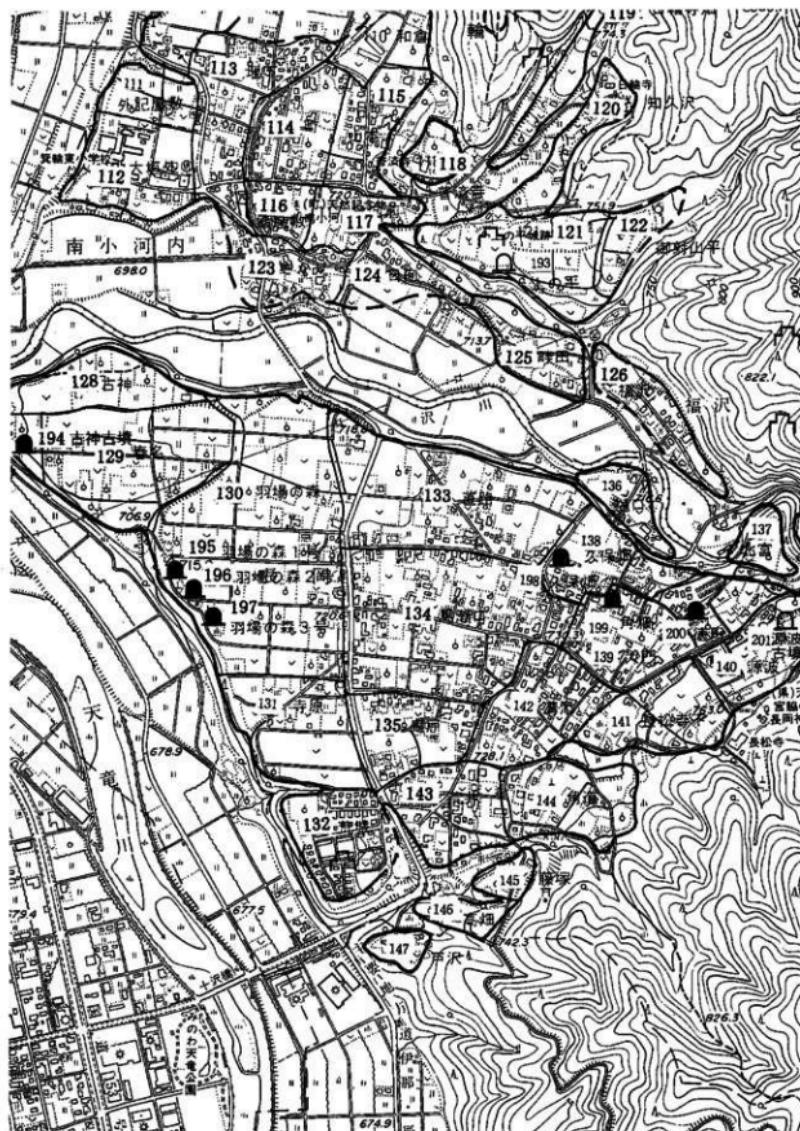
箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川と段丘下の湧水など、水源に恵まれており、先史より人々が暮らしやすい格好の場が多く存在する。町内には先人たちが残した足跡ともいいくべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地182ヶ所、古墳27ヶ所、城跡13ヶ所が確認され、上伊那郡下において屈指の遺跡地帯として知られている。

遺跡の多くは前述のとおり、段丘及び扇状地に立地しており、特に竜西の遺跡の分布状況は、2から3段になる段丘の突端部、中小河川の両岸、山裾など、ほぼ3箇所に見られる。本年度までに実施された発掘調査例を中心に概観してみると、縄文・弥生・古墳・奈良・平安の各時代の集落址や墓域を中心とした生活の痕跡、さらに町の南部の氾濫原に広がる箕輪遺跡に代表される、稲作の痕跡を見せる生産遺跡も確認されている。

今後これらの遺跡を保護していくためにも、一帯における開発には十分注意していく必要がある。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				旧	縄	弥	古	奈	平	
196	羽場の森2号墳	長岡	段丘突端			○				町史跡
194	古神古墳	長岡	段丘突端			○				別称 春名古墳
195	羽場の森1号墳	長岡	段丘突端			○				町史跡
197	羽場の森3号墳	長岡	段丘突端			○				町史跡
198	久保畠古墳	長岡	扇 央			○				
199	角畠古墳	長岡	扇 央			○				
200	徳円古墳	長岡	扇 央			○				別称 大門古墳
201	源波古墳	長岡	扇 頂			○				昭和62年度調査 町史跡
128	古神	長岡	扇 央	○	○	○		○	○	平成2年度調査
129	春名	長岡	段丘突端	○	○	○		○	○	
130	羽場の森	長岡	段丘突端	○	○	○		○	○	
131	寺原	長岡	段丘突端	○	○	○		○	○	
132	荒城	長岡	段丘突端	○	○					城跡含む
133	直路	長岡	扇 央	○				○	○	
134	馬瀬口	長岡	扇 央	○	○			○	○	
135	鬼戸	長岡	扇 央	○				○	○	
138	久保畠	長岡	扇 央	○	○			○	○	
139	大門	長岡	扇 頂	○	○			○	○	
140	源波	長岡	扇 頂	○	○			○	○	
141	長松寺下	長岡	扇 頂	○	○			○	○	
142	溝添	長岡	扇 央	○		○		○	○	
143	荒井	長岡	扇 央	○				○	○	
144	角道	長岡	扇 央	○	○			○	○	
145	藤塚	長岡	扇 頂					○	○	



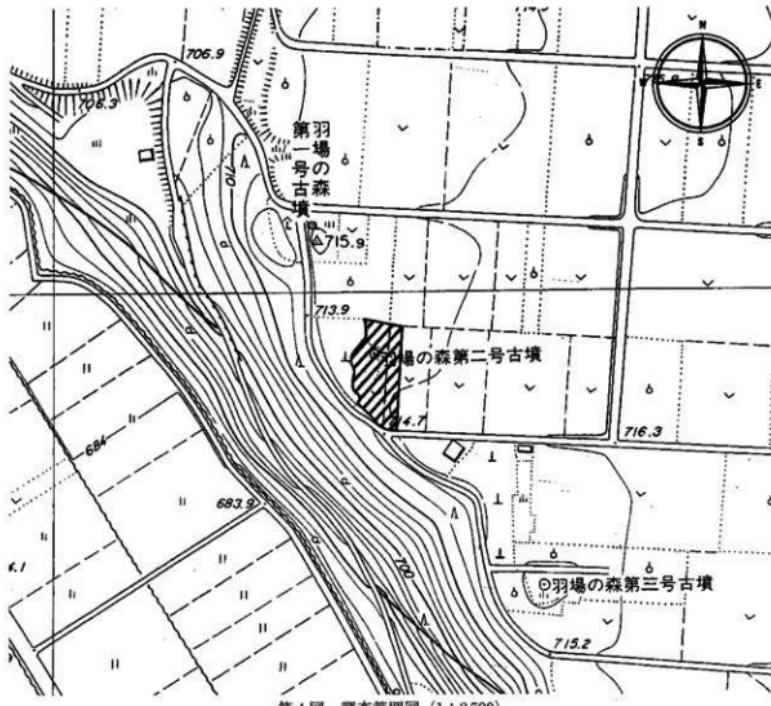
第3図 周辺遺跡分布図 (1:10,000)

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査方法と経過

調査実施前の本古墳は、その内部や墳丘部には多くの枯れ枝や腐敗した落ち葉等が堆積し、雑草が多い茂っており、形状はおろかまざとそれが古墳であることすらわからない状態であった。そのため、調査に先駆けて古墳を覆うそれらの除去を行ったが、かなり破壊が進む古墳であることがわかった。

調査は、墳丘の外部構造と盛土の堆積状況の把握と現存する石室の積み石の状況、墳丘を外周すると想定される周溝の有無とその検出をめざし、古墳の中央付近から放射状に4本のトレチを設定し掘削した。墳丘部は、自然堆積層までの盛土を断ち割り、石室の積み石の状況確認を行い裏込め石は積み石との接点の確認のため一部取り外したが、極力露出した状況のままとした。周溝は、限られた調査範囲内の掘削だったため、完全にその幅や形状を確認できなかった箇所もあった。石室内部は、石室の天井を構成していたと想定される巨大石が散在していたが、それらを除去することが調査を進めるうえで危険を伴う恐れがあると判断したため、現状を維持する範囲で棺床の確認と遺物の検出を目指した。



第4図 調査範囲図 (1:2,500)

記録は、墳丘が25cm毎での起伏状況と露出した積み石の他、石室内部の巨大石等も含めた現況の平面図を作成し、墳丘断面及び周溝内の土層堆積状況の断面測量を行い、写真撮影等の記録作業を進めた。

ベンチマークは、羽場の森古墳1号の墳丘頂部に存在する三角点より移動を行い、2号古墳墳丘頂部に位置する樹木の切り株に設定(717.573m)した。

なお、墳丘にはカヤ・エノキ・コブシ等の樹木が大きく成長して古墳全体を覆っており、その根は墳丘と石室の積み石を圧迫していた。樹木の成長に伴う根の侵攻は、今後の古墳の破壊につながることが懸念され、また調査と調査後に実施する復元工事においてもその妨げになることから、地権者の同意を得て専門業者に委託して樹木の伐採を行っている。

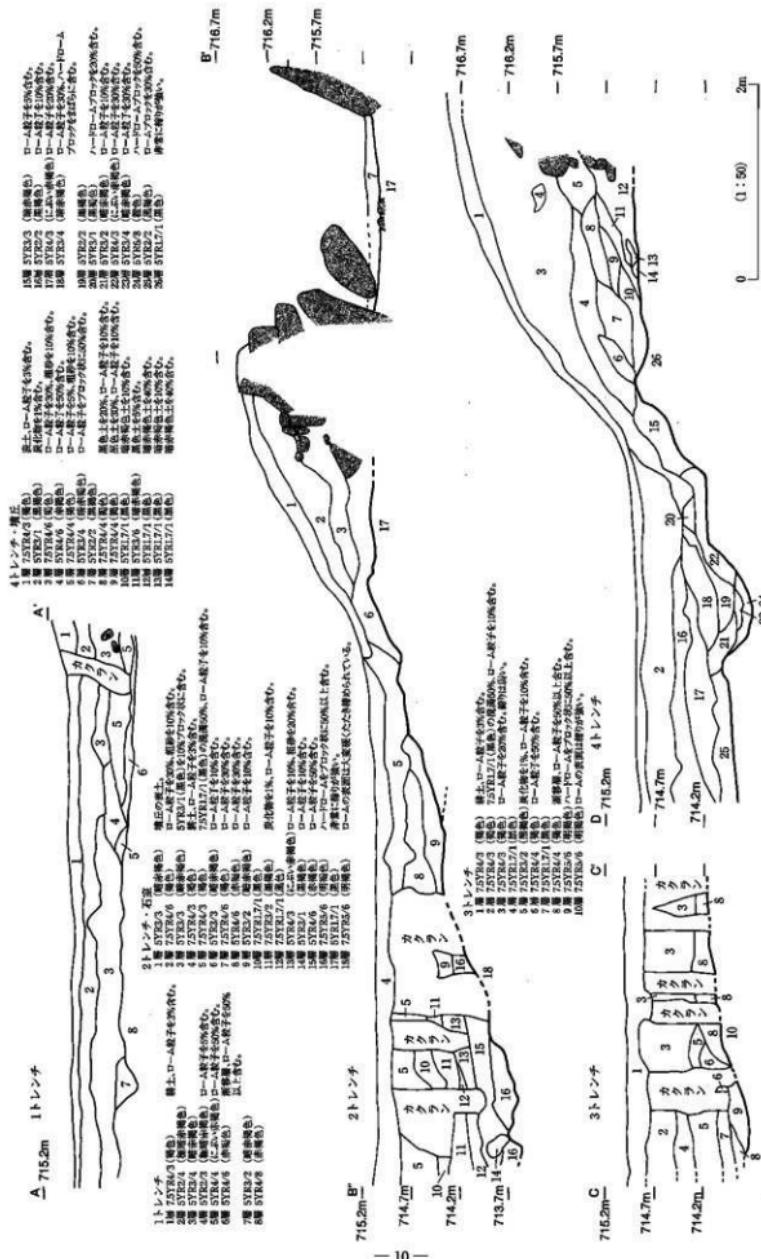
第2節 墳丘

調査前の墳丘の状況は、石室の入口にあたる南側部と墓域に接している西側部の盛土のほとんどが削り取られ、これらと共に石室を構成する狭道と左側壁も失われていた。また、東側部も、隣接する畠地の開墾による侵食を受けていた。現存する古墳の形状を測量したところ、主軸長17.2m、主軸の直交長で12.3m、高さは1.8mの規模で、無花果状にかなり変形した形状であった。

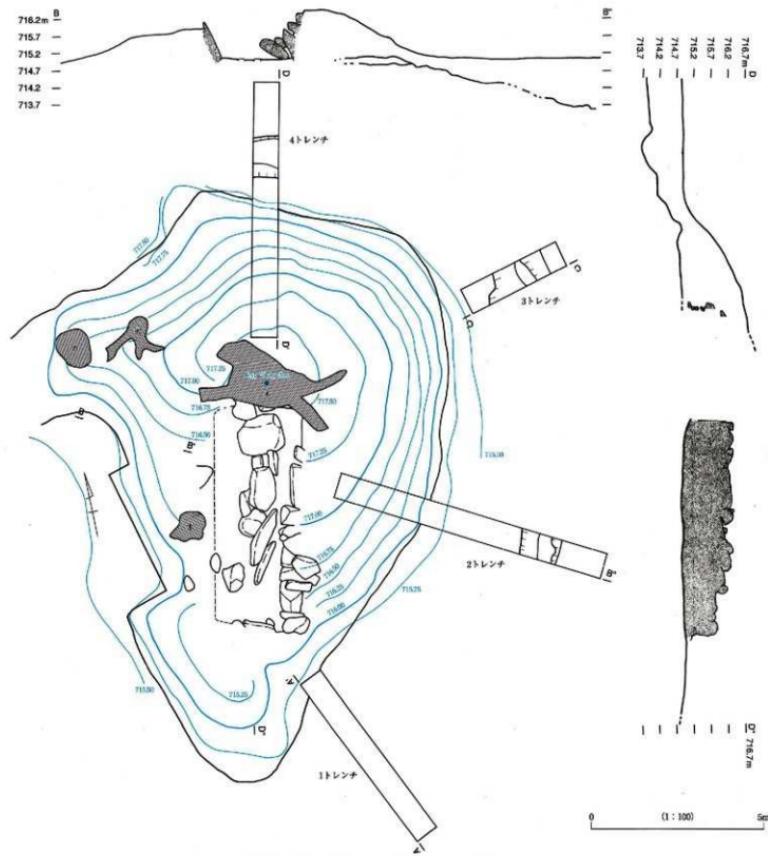
今回の調査では、古墳本来の規模と形状を探ることが大きな課題であった。墳丘は、盛土の状況と石室の構築状況を確認する目的から、主軸方向の北側箇所(4トレンチ)と主軸直交方向の東側箇所(2トレンチ)において墳丘を断ち割った。それにより、平地面とほぼ同じレベルで、混入物のない締りの強い黒色土の自然堆積層が現われた。後述する石室の棺床下部からも、ほぼ同レベルでそれが確認でき、本古墳構築前の基盤部にあたると判断した。盛土は、その上半部がおおむね2~3に分層される褐色土により、墳丘の裾から墳丘の中心部にかけて重ねるように盛り上げられ、いずれも強い締りはなく意図的に叩き締めたとは感じられなかった。しかし、北側箇所においては、盛土下半部が細かく10分層から構成され、かつ上半部よりもかなり強く締っており、その差は顕著に伺えた。また、石室の石積みに到達する手前からは裏込め石が確認できた。なお、各層いずれの盛土も、砂粒や石などの混入物はほとんどない胎土で、周辺平地にみられる胎土の特徴とほぼ一致している。とりわけ外部から搬入されたような特異な混入物等の痕跡はなく、あくまでも周溝構築時の排土または隣接地から用いたものであろう。

裏込め石は、石室に接する部分には泥岩・粘板岩等の拳大の角礫が主に用いられ、花崗岩・砂岩等の拳大から人頭大の円礫がそれを覆うように積み上げられていた。下部ほど大型の石が多く小型の石はその隙間を補強する形で積み上げられ、石室の石積みとの接点までおよそ50cmほどの厚みを持ち、上部はほとんど小型の石だけで20cmほどの厚みしかなかった。

墳丘の断ち割りとともに、その他2箇所で周溝の検出を目指して掘削を行った結果、1.4~3.2m幅で、深さ0.5~1.0mの周溝が確認できた。その断面形は幅の狭い北側箇所(4トレンチ)でレンズ状、最もその幅が広い東側箇所(2トレンチ)で不整形ながら「V」字状を呈している。また、古墳の南側箇所(1トレンチ)ではそれが検出できなかったことを考慮すると、石室の入口部には意図的に構築されていない可能性がある。その結果想定される周溝の規模は、内周が直径およそ16mの円形を呈し、外周は



第5図 トレンチ・土壌断面図



第6図 古墳構造平面図・断面図・トレンチ設定図

主軸長がおよそ20m、直交長がおよそ22mの梢円形で、全体の形状は主軸方向がやや潰れた「C」字状を呈しているものと推測される。その結果、内周が盛土の裾部にあたることから、本古墳はおよそ直径16mの円墳であることがわかった。

第3節 石室

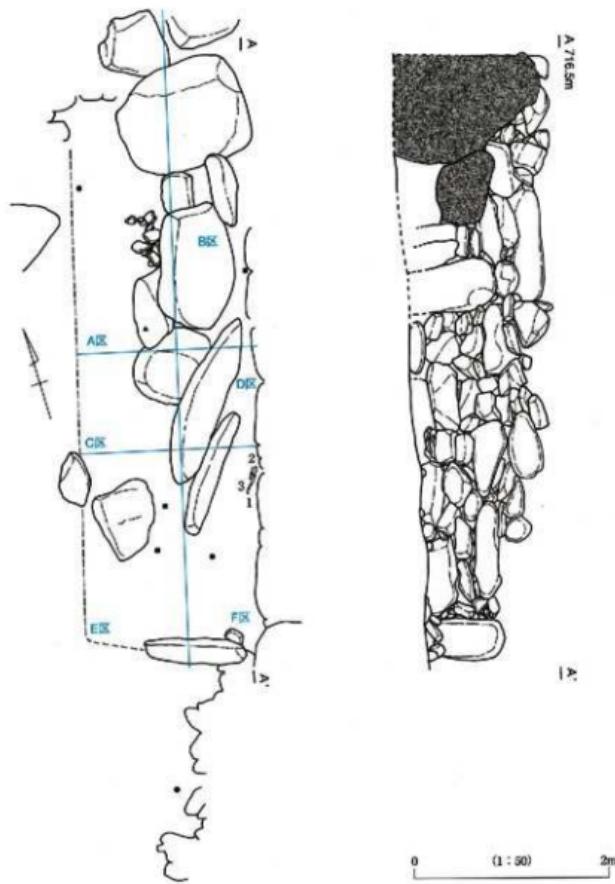
本古墳の石室形式は、南側を開口する主軸方位N-165° - Wを指す横穴式石室である。羨道箇所はすべて攪乱を受けている。玄室左側壁は、奥壁との角にあたる下部に、積み石が崩壊した痕跡を残す人頭大の円石が見つかっただけで、そのほとんどが失われており、玄室右側壁と羨道との境界にあたる樋石だけが残存するだけであった。また、天井石もなく、それを構成していたと思われる1.5m~2.0mの長さを持つ推定1.5トン前後の巨大石3枚が、6点の側壁を構成していた円石と共に棺床直上に落下した状態で見つかっている。また、奥壁にあたる箇所には、天井石より幅の広い推定2トンもの巨大石が、斜めに倒れかけた状態で見つかり、その裏側には裏込め石が露出していた。

残存する右側壁石は、まず0.8~1.0mほどの扁平な円石が土台（奥壁に近い箇所では、一部柱状の石も使用）となり、その上を0.3~0.8mの扁平な円石により、壁面がほぼ直線状になるよう積み上げられ、現存する高さは1.7mほどで、部分的に崩落ないし石の粉失もみられる。石積みの隙間に、拳大の円石がはめ込まれ、それを補強している。また、玄室の入口にあたる角には、0.8mほどの高さを持つ袖石が立てられている。特に羨道との境界を明確にするなどの追出しそではなく、玄室壁面とほぼ一直線状に並ぶことから、片袖式石室の可能性が高い。

石は、すべて角がない花崗岩を主体（一部砂岩）とする扁平な河原転石を用い、意図的な面取り等の加工を施さず、側辺が平坦であるものを特に選定し、その平坦面が壁面となるよう、土台から上部にかけて徐々に追出しながら積み上げられている。それらは、段丘下の天竜川や北方に流れる沢川から容易に採取できるものである。

棺床は、ほぼ平坦で基盤層から繊りの弱い10cmほどの厚みで褐色土が検出できただけで、平石や玉砂利等による床の造作は確認できなかった。ただ、右側壁との接点から一部粘板岩の平石数点が見つかったが、積み石の補強材としての役割が妥当と考えられた。

玄室の平面形態はほぼ長方形を呈し、長さ6.3m、推定幅1.8mを測る。現存する高さは1.7mであったが、構築時は更に30~50cmほど高かったのではなかろうか。また、羨道についてはまったく不明であったが、墳丘の推定規模から計算すると3.5m前後の長さが想定でき、よって石室全長は推定9.8mの規模となろう。



第7図 石室展開図・遺物出土状況図

第4節 出土遺物

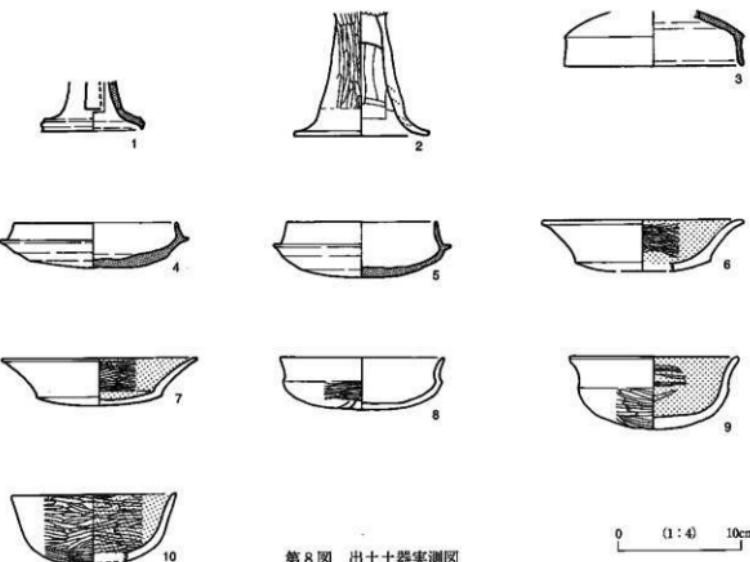
今回の調査で出土した遺物は、土器類、玉類、鉄器、金銅製の金属器等で、本古墳との関連性をもつものは玄室内と羨道部からが主体であり、周溝内からの出土を見なく、全体的な出土量も少なかった。また、被葬者の痕跡を示す骨等の遺体遺物が数点見つかっている。

なお、一部墳丘上部や周溝上部からものがみられたが、本古墳と関連性のない縄文中期土器や古代・近現代のものばかりであった。

図化した遺物の多くは、箕輪東小学校に所蔵されている伝・羽場の森古墳第2号出土の既出遺物である。郷土博物館に残されていた、昭和30年代前半に撮影されたと思われる上記古墳の出土遺物写真との照合で、本古墳出土遺物として判断し紹介する。

以下で、それぞれの種別ごとに概略を記し、個々の遺物については観察表を参照されたい。
土器一土器類は、須恵器が高坏（1）、蓋（3）、蓋受けを有する坏（4・5）が、土師器は高坏（2）、坏（6～10）が出土している。

1の高杯は羨道部の搅乱土からの出土で、あとは数片の土師器が玄室内よりみられただけで、その量は少ない。図化した2～10は、すべて伝・羽場の森古墳（第2号）出土とされるものであるが、今回の調査で7の杯と接合する小端片が見つかったことにより、これらが本古墳出土資料としての立証を得ることができた。その他、上記既出遺物とともに縁・横瓶等の小破片も保管されていたが、注記等の記載がなく本古墳からの出土とは立証することはできなかった。

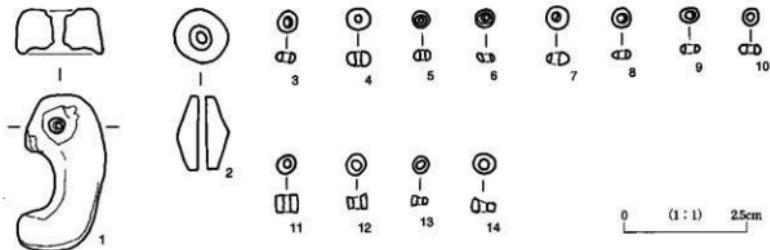


第8図 出土土器実測図

第2表 出土土器観察表

(法量—上から口径、底径、高さ、単位cm)

番号	器種	法量	成形・器形の特徴	文様・調査	備考
1	高 坏 (脚部)	— (8.4) (4.0)	脚部の透し穴は三角形で3ヶ所にあけられている。 ロクロ底形。	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	後世に付いたと思われるすが付着している。 5GY 2/1 オリーブ黒
2	高 坏 (脚部)	— (11.2) (10.3)	坏部との接合関係は脚を坏に直接着け、その後補強のため脚部中央部に粘土を埋め込んだ。	外面一ハラミガキ 脚部一ヨコナデ 内面一ハラケズリ 脚部一ヨコナデ	箕輪東小学校所蔵品 外面橙色、内面・下部橙色、上部黒色。
3	蓋	15 — (4.5)	外面天井部はない。 身受を有する。	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ ハラケズリ	箕輪東小学校所蔵品
4	坏	13.4 — 3.7	外面底部は回転ヘラキリ、口縁部は内傾している。 蓋受を有する。	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	箕輪東小学校所蔵品
5	坏	12.4 — 4.5	外面底部は回転ヘラケズリ、十字の刻書あり、口縁部は内傾している。 蓋受を有する。	外面一ロクロナデ 内面一ロクロナデ	箕輪東小学校所蔵品
6	坏	16.4 — (4.2)	内面黒色処理。 下部で屈曲し、ラッパ状に開く。	外面一ロクロナデ 内面一ハラミガキ	箕輪東小学校所蔵品 外面橙色一部黒色。焼きは良好。 白色の小石をまばらに含む。
7	坏	16.0 — 3.9	内面黒色処理。 下部で屈曲し、ラッパ状に開く。	外面一ロクロナデ 内面一ハラミガキ	箕輪東小学校所蔵品 外面橙色 表面は跳い。 焼きは良好。
8	坏	13.4 — 4.3	口縁部は外反する。	外面一ハラミガキ 底部一手持ちヘラケズリ 内面一ヨコナデ ハラミガキ	箕輪東小学校所蔵品 焼成は良好で外面は茶褐色。
9	坏	14 — 6	内面黒色処理。体部は丸みを帯び、 口縁部は外反する。	外面一ハラミガキ 内面一ハラミガキ 口縁部一ヨコナデ	箕輪東小学校所蔵品 胎土に小石を多く含み、明赤褐色。
10	坏	(13.4) (5.2) (5.6)	内面黒色処理。	外面一ハラミガキ 内面一ハラミガキ	10YR5/6 黄褐色



第9図 出土玉類実測図

玉類一勾玉（1）、算盤玉（2）、ガラス小玉（3～10）、白玉（11～14）が出土している（第9図）。いずれも棺床付近直上の土の箇い出しと洗浄作業によって確認されたもので、図化した14点のみであった。なお、伝承によると、その他切子玉が出土したとされているがその所在は不明である。

1の勾玉は、片面穿孔による琥珀製で、形状は古墳時代後期的な「コ」の字状を呈し、裏面孔の縁部の欠損は、穿孔作業時によるものであろうか。石室内F区床面の土から出土している。ガラス小玉8個は、不純物をほとんど含まない透明度の高い青色の素材であり、径は0.35～0.5cmで、厚さは0.2cmほどでほぼ大きさは一定している。白玉4個は、径はほぼ同じだが厚さにややばらつきがみられる。

第3表 出土玉類観察表

(単位: cm・g)

番号	出土位置	種別	最大径	長さ	厚さ	重さ	備考
1	F区	勾玉		3.2	1.7	3.5	琥珀製、明褐色
2	E区	算盤玉	1.1	1.5		2.3	滑石製、灰色
3	A区	ガラス小玉	0.4		0.2	0.1	青色
4	A区	ガラス小玉	0.5		0.3	0.1	青色
5	E区	ガラス小玉	0.35		0.2	0.1	青色、少し縁がかっている。
6	F区	ガラス小玉	0.4		0.2	0.1	青色、少し縁がかっている。
7		ガラス小玉	0.45		0.23	0.1	青色
8		ガラス小玉	0.38		0.2	0.1	青色
9		ガラス小玉	0.4		0.2	0.1	青色
10		ガラス小玉	0.4		0.2	0.1	青色
11	A区	白玉	0.38		0.4	0.1	滑石製、黒っぽい灰色
12	A区	白玉	0.4		0.3	0.1	滑石製、黒っぽい灰色
13	E区	白玉	0.31		0.2	0.1	滑石製、黒っぽい灰色
14		白玉	0.45		0.3	0.1	滑石製、灰色

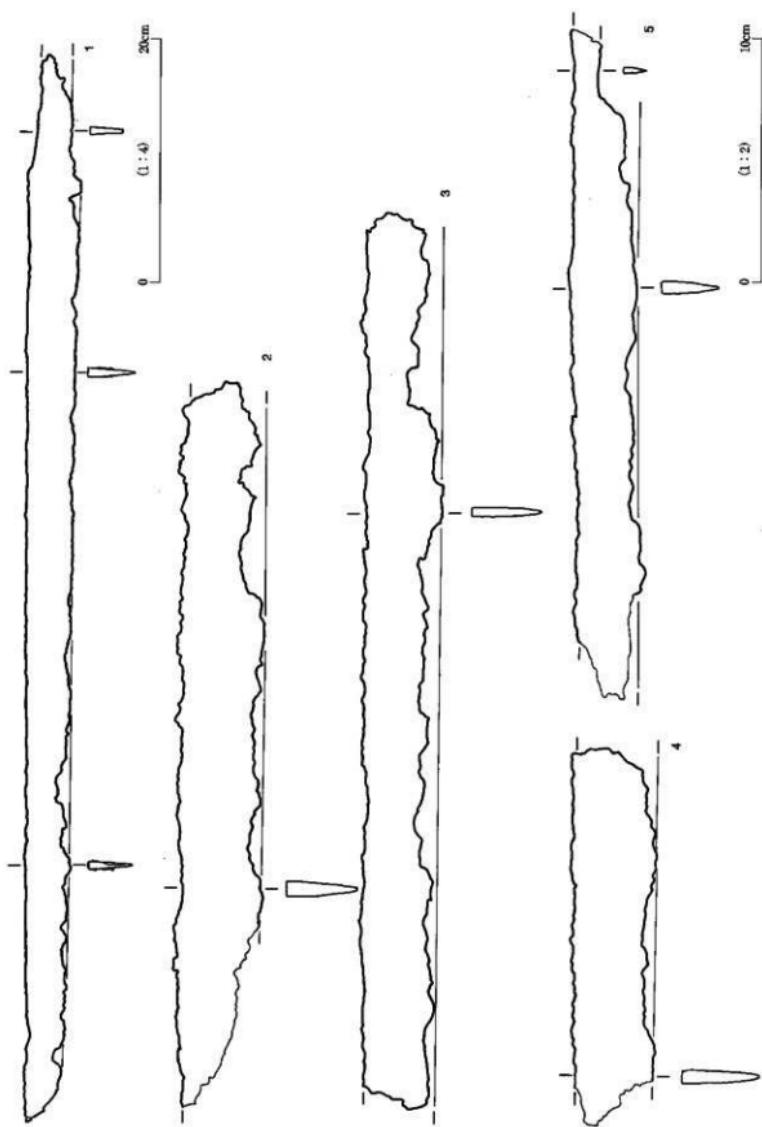
鉄器・金属器一直刀5点（第10図）、轡（第11図）は、すべて笠輪東小学校所蔵の本古墳からの既出遺物で、かなり劣化が進んでいる。今回の調査では、鐵鎌13点と金銅製帶金具1点が新たに見つかっている（第12図）。鐵鎌は、玄室の棺床は直上で、右袖の石積とは接する箇所から出土が集中している。なお、伝承によると、金環が出土したとされているがその所在は不明である。

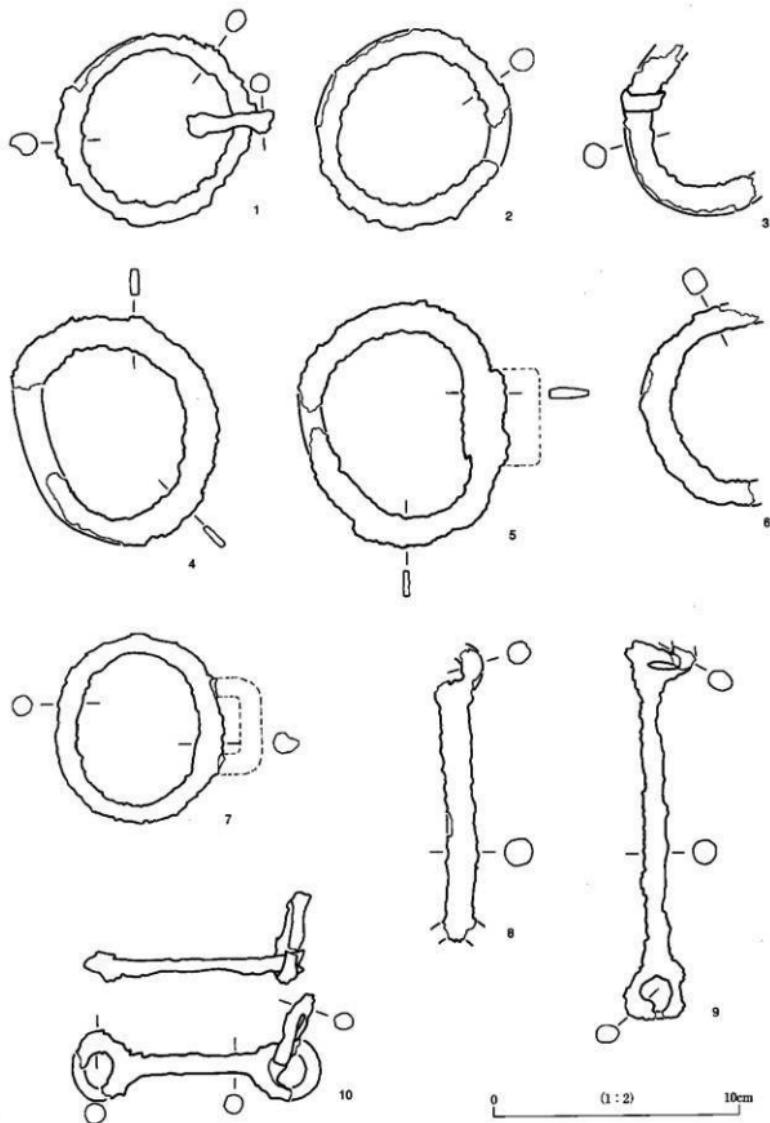
直刀1は刀身の長さが88.1cmで、柄頭・鞘を装着した長さは1mにも達する大刀である。2と4については同一固体と思われる。すべて保存処理されているものを図化したもので、観察表に表示している重量は処理後の計測である。

馬具としては轡が出土している。鏡板が1～7、8・9が引手、10は衡である。4・5の鏡板は断面が方形を呈し、外面径9.5～10cm内面径7～7.5cmで類似しており1対と考える。鏡板や引手の相異関係により轡は2個体以上存在したと思われる。また、すべて鉄製素環鏡板付轡で、8・9とも引手先の輪は約45度の角度で外側に曲げている。15（第12図）は、板部の長さ1.5cm、幅0.8cm、鉄地金銅張の小端片で、鉄頭部が確認でき留金具の一部であろうか。

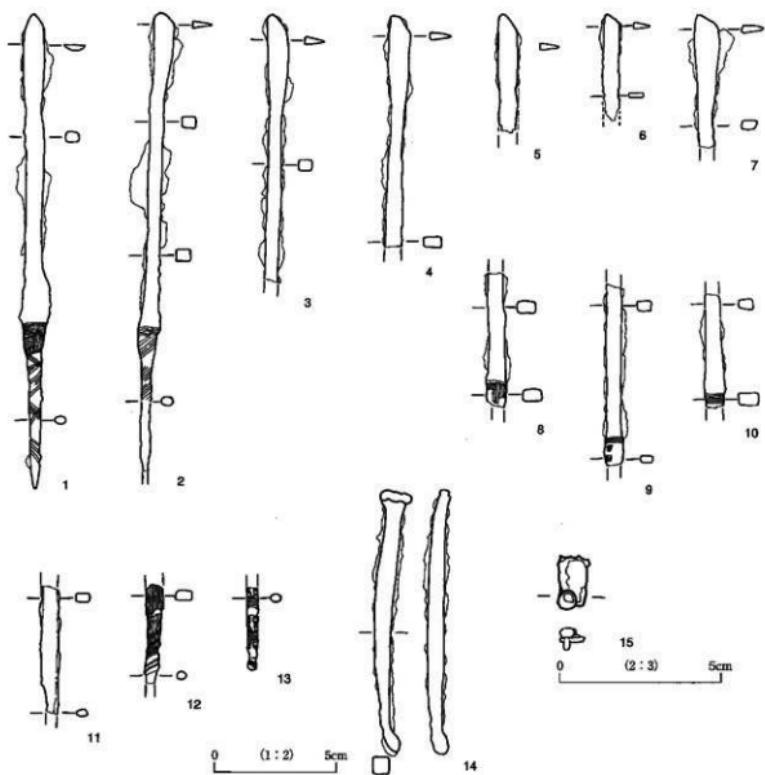
鐵鎌は、鎌身が残る7点とも有茎式の長頸鎌である。鎌身については1が両刃、2～7までは片刃である。茎部には、矢柄に装着する際の繊維痕が、斜方向ないし横方向に巻きつけた痕跡として観察できる。

第10圖 出土銁器（鐵刀）實測圖





第11図 出土鉄器（唐）実測図



第12図 出土鉄器(鐵鎌・釘)、金属器実測図

第4表 出土鉄器(直刀)観察表

(単位: cm · g)

番号	種別	長さ	重さ	幅	厚さ	備考
1	直刀	(88.1) 刀部(78.6) 基部(9.5)	(730)	4	0.8	箕輪東小学校所蔵品 ほぼ完形に近い。 刀身は鏽をもたない平造りで、刃間・背間を有する。
2	直刀	(30.1)	195	(2.9)	(0.5~0.1)	
3	直刀	(36.9)	170	(2.95)	(0.4~0.1)	
4	直刀	(15.6)	105	(3.15)	(0.6~0.1)	箕輪東小学校所蔵品 保存処理済のため、すべての測定値には、保存処理の薬剤を含む。 断面図は予測される図になっている。
5	直刀	(27.0)	140	2.45	0.6~0.1	

第5表 出土鉄器（轡）観察表

(単位:cm・g)

番号	種別	重さ	長さ		備考
			長径	短径	
1	轡	49	8.2	7.8	
2	轡	40	8.2	7.5	
3	轡	29	(一)	(一)	
4	轡	35	9.8	(8)	
5	轡	47	10	(8.5)	
6	轡	25	(一)	(一)	
7	轡	48	(7.8)	(7.0)	
8	轡	31	12		
9	轡	50	15.4		
10	轡	39	9.8		

箕輪東小学校所蔵品
保存処理済のためすべての測定値には保存処理剤を含む。なお、断面図は、予測される図になっている。

第6表 出土鉄器（鉄轡）観察表

上段 長さ、下段 幅 (単位:cm・g)

No	現存長	轡身部	頭部	茎部	重量	備考
1	19.3	3.8 0.8	8.7 0.6	—	6.8 17.6	尖鋸状の轡身部に棒状の長い茎を有する。両側で長く平行した両刃の轡身部。台形範被片丸轡。長頭轡、完形 轡身部と頭部の間で巾が減少している。 残存植物質の断面観察によると、茎部を最初に細い植物纖維で横巻してから矢柄を装着し、その上を再び植物纖維で横巻にして矢柄を固定している。
2	18.8	3.3 0.8	9.6 0.6	—	5.9 15.6	2つがさびで接合していたうちの1つで、折れてはいるが完形の長頭轡である。 片側辺に刃がつくものと考え範被ぎは台形範被。 茎部には巻きつけた植物纖維痕と矢柄の植物痕が残る。
3	(11.0)	3.7 0.87	0.5	—	(9.9)	片側辺に刃がつくもので、範被ぎ以下は不明であるが長頭轡と考える。
4	(9.5)	3.5 0.9	(6) 0.7	—	(7.9)	轡身部は片刃轡。 頭部は70%。長頭轡
5	(4.9)	3 0.8	1.9 —	—	(3.6)	轡身部は片刃轡。 頭部は一部残っているのみ。長頭轡
6	(4.3)	0.7	0.6	—	(2.0)	片側辺に刃がつくもので、長頭轡と考える。
7	(5.5)	3.4 0.95	(1.1) 0.6	—	(5.6)	片側辺に刃がつき、頭部中央付近で折れている。長頭轡
8	(5.6)	—	(4.5) 0.7	0.8	(3.8)	範被ぎ部は台形範被。 茎部には巻きつけたと思われる植物纖維と矢柄の植物痕が残る。長頭轡
9	(7.4)	—	(6.2) (0.55)	(0.5)	(7.1)	茎部には巻きつけたと思われる植物纖維痕が残る。長頭轡
10	(4.65)	—	(4.1) (0.6)	—	(3.2)	範被ぎ部は台形範被。 茎部にはしっかりと巻きつけたと思われる植物纖維痕が残る。長頭轡
11	(5.2)	—	(4.0) (0.6)	—	(3.8)	長頭轡の頭部と茎部。 範被ぎの形式は分からない。
12	(4.1)	—	—	0.65	—	長頭轡。範被ぎ部分は不明。 茎部は細い纖維で横巻して矢柄を装着し、再びその上を植物纖維で横巻し、矢柄を固定している。
13	(3.35)	—	—	—	(0.8)	長頭轡の茎部先端部。

第7表 その他出土金属器観察表

(単位:cm・g)

No	種別	器形	全長	重量	備考
14	釘	角釘	10.1	19.65	頭部は直角に折り曲げて平坦面が作り出されている。
15	飾り金具	方形留金具	1.5	1.03	鉄地金網張留金具？馬具の帶金具の一部か。

第IV章　まとめ

第1節　調査の成果

長岡原状台地上には併せて8基の古墳が現存している。かつては、まだ多くの古墳があったと伝えられるこの地において、その先端部に近接して3基の古墳がグループを形成するこの羽場の森古墳は、本地域における貴重な財産として、多くの人々の努力により手厚く守られてきた。しかし、今回整備復元事業の対象となった2号墳は、昭和20年代後半から本地域一帯で盛んに行われた土地改良の際、道路工事に必要な資材となる土の確保のために、やむなくその一部が破壊されたと言われている。

このような経過を踏まえ、地元歴史研究家の故小口珍彦氏により、本古墳破壊直後に調査が実施され、その状況を詳細に記録し出土遺物が採集されている。その後小口氏の記録を基に、当時国学院大学考古学教室の学生であった藤沢平治氏が、昭和34年に本古墳について分析を行い県教育委員会に報告している。その報告の中で注目すべき内容を紹介し、今回の調査結果を踏まえて検証する。

古墳の規模は、「径17.14m、高さ1.9m。信濃考古総覧に記載…」とあるが、今回周溝が確認されたことにより、直径およそ16.0m、高さ2.5m前後の高さを有する規模であることがわかった。

石室の状況は「大小約300個の平均50×30cmの河原石によって南南西に開口する石室を持ち、天井石と推定される石（180×140cm）（120×60cm）大のもの6ヶ現存している。東壁及び奥壁の一部は残存しており、朱の着色があったかに見られるが、明らかではない。西壁はその2ヶを残して全て動かされて…。石室の巾は185cm…高さは125cm…。床面は人頭大の河原石が一面に敷き詰められていたといわれ、…南東の一部に残されていた…。」と記述があるが、現状とこの内容がほぼ一致している。破壊を受けたその当時から40年以上も経過しているにもかかわらず、その後の破壊は受けずに今に至っていることがわかった。ただ、今回の調査でも石室に付着した朱の確認はできなかったが、壁面の石に一部火熱を受け赤色を帯びた箇所は確認している。床面も、明らかに石敷きを行っている状況は確認できていない。

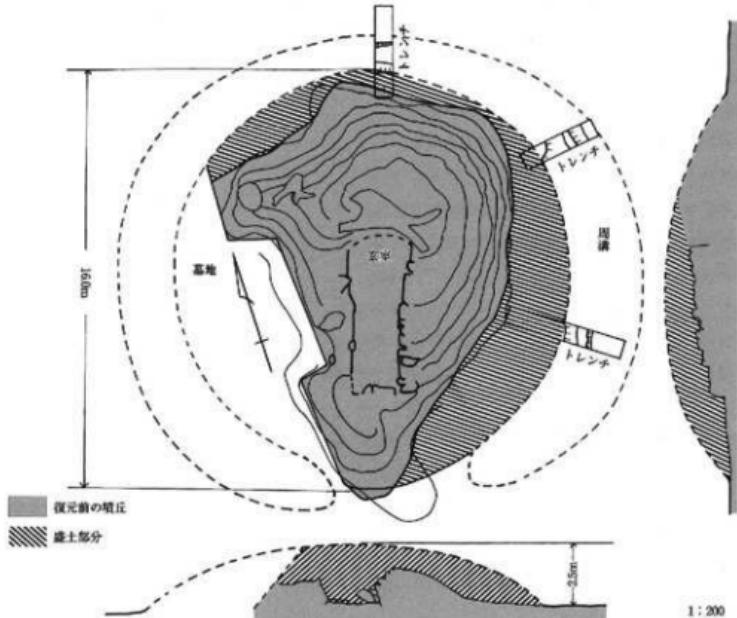
出土遺物は、「人骨一関節・頭の部分であるが、新しい様であるがその出土地点も不明確であり…後世のものではないか。馬具一巻の破片7個、直刀3～4振り、実に保存状態が悪い。金環1個外径3.5cm、内径1.7cm、厚さは径約1cm。土器一土師器は十数片のみであり、高杯脚部含まれる。…焼成は良好で内面は黒色処理されている（坏か？）。須恵器は3。玉類一丸玉1個、切子玉3個。後に運ばれた土の中から後に小口氏が採集したもの…。」とある。遺物は、今回の調査で新たに、勾玉、ガラス製小玉、鉄鎌、金銅製帯金具が見つかっている。また、今回出土した土師器の坏の小端片と、既出坏とが接合した。しかし、記述にある金環と切子玉については、地権者の方々に伺ってもその存在は不明であった。全体的にその出土量が少ないとから、破壊時における小口氏の懸命な採集を考慮すると、土が撒出される以前においてすでに盗掘され、古墳から紛失した可能性が考えられる。

本古墳出土の土器類の構成や各土器の特徴は、同地区に所在する源波古墳調査報告例での出土土器とを対比すると、本古墳出土のものはそれより古い様相を示している。むしろ、仲町遺跡（同町松島）で検出された古墳周溝出土一括資料にみられる諸特徴と最も類似している。よって本古墳は、古墳時代後期、およそ6世紀末にその時期設定を置きたい。

第2節 古墳の整備復元と保護

今回の事業は、墳丘と石室の崩壊を防ぎ後世に残すため、その保護・保存を目的とする古墳本体の整備復元と、古墳に隣接する土地を公有地化して緑地化等による周辺整備を実施した。調査の結果により、第13回のとおり、径16.0m、高さ2.5mの規模となる、土鏡頭状の墳丘形状を想定した。

復元は、隣接する墓地への影響も考慮すると、源波古墳のように石室内に入り出しができるような石室の左側壁と天井部の造作は不可能である。また、石積みが崩落し見学者への危険性が考えられるため、現状のまま石室を開口しておくことは難しい。よって工事は、露出したこれ以上の右側壁の崩落を防ぐため石室内には砂を入れてその保護をする。ただし、落下している天井石は石室頂部に乗せたり他に移動することはせずに、落下した現状のまま砂をかぶせる。その上から、想定される規模と高さとなるよう盛土を施し（墓地と隣接する南西側は直線状に傾斜をつける）、十分な填压をかける。その表面は、盛土の崩落を防ぐため芝を貼る。特に葺き石は施さないが、石室の開口部がわかるように平石を葺く。古墳の隣接地は、古墳本体同様に芝を張り、道路と接する箇所は砂敷きによる駐車スペースを、墓地と畠地との境界内側にはサツキの植栽を行って、狭い範囲ではあるが緑地公園として環境整備した。



第13回 古墳復元図

事業に伴う樹木の伐採は、平成11年1月に和光重機有限会社、復元及び造園工事は、同年3月に小池造園にそれぞれ委託して実施した。なお、整備後の整備等の管理については、通年で地元長岡区が全面的に協力していただくことになった。

本書の末筆にあたり、古墳の消滅の危機を案じ、その保護保存に向けた審議を重ね、実現へとご努力いただいた町文化財保護審議会各委員の皆様をはじめ、冬季における調査に携わった団員の皆様、そして本事業に全面的なご理解とご協力をいただいた地権者の皆様と地元長岡区に対し、本書の刊行をもって心より感謝申し上げる次第である。

引用・参考文献

長野県史刊行会	1981	長野県史 考古資料編 全1巻(1)	遺跡地名表
長野県史刊行会	1985	長野県史 考古資料編 全1巻(2)	中・南信版
長野県史刊行会	1988	長野県史 考古資料編 全1巻(3)	遺構・遺物
箕輪町誌編纂刊行委員会	1976	箕輪町誌 第1巻 自然・現代編	
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	箕輪町誌 第2巻 歴史編	
長野市・更埴市教育委員会	1987	『土口将軍塚古墳』	
佐久市教育委員会	1988	『長峯古墳群』	
飯田市教育委員会	1988	『ナギジリ一号古墳』	
箕輪町教育委員会	1987	『源波古墳』	
箕輪町教育委員会	1987	『源波古墳』	
箕輪町教育委員会	1992	『郷沢遺跡』	
箕輪町教育委員会	1995	『松島大原遺跡』	
更埴市教育委員会	1992	『森將軍塚古墳』	
須坂市教育委員会	1992	『本郷大塚古墳』	
山梨県教育委員会	1985	『四ツ塚古墳群』	
箕輪町文化財保護委員会	1962	『長岡古墳群調査書』	
中川村教育委員会	1979	『信濃片桐古墳』	
長野県埋蔵文化財センター	1990	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編	
長野県埋蔵文化財センター	1990	中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8－松本市内その5－北栗遺跡	
長野県埋蔵文化財センター	1996	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7－長野市内その5－大星山古墳群・北平1号墳	

図 版



調査前（東方より）



古墳上空より



調査地近景（東方より）



石室（南方より）

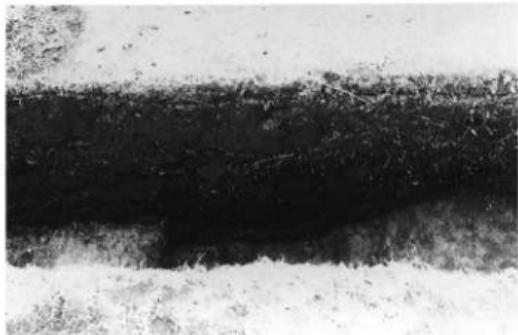
1 トレンチ断面



3 トレンチ断面



4 トレンチ断面





2 トレンチ断面
石室裏込め石出土状況



4 トレンチ
石室裏込め石出土状況



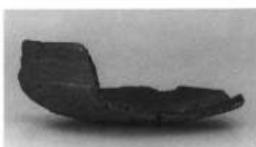
鉄槍出土状況



8-2



8-1



8-8



8-9



8-10



8-6



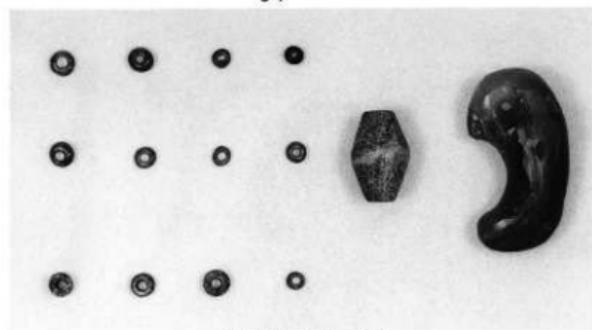
8-7



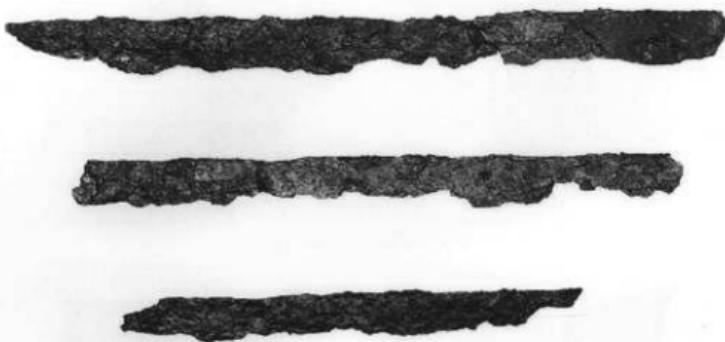
8-4



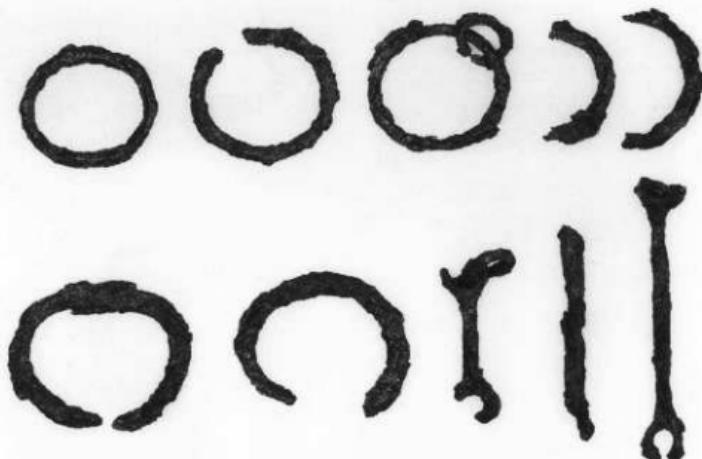
8-5



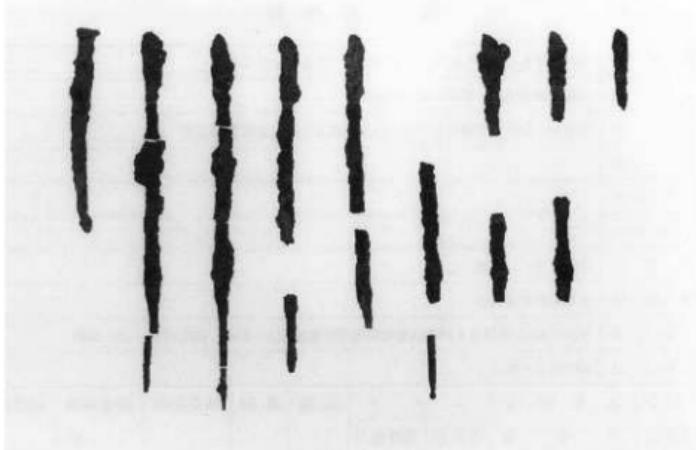
出土遺物 土器・玉類



出土鐵器（直刀）



出土鐵器（帶）



出土鉄器（鉄鎌）



箕輪東小学校児童の見学会

報 告 書 抄 錄

ふりがな	みのわまちしていしせき はばのもりこふんだいにごう							
書名	箕輪町指定史跡 羽場の森古墳第2号							
副書名	平成10・11年度整備復元事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	赤松 茂 横橋とし子							
編集機関	箕輪町教育委員会							
所在地	〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地 TEL 0265-70-6603							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
はば 羽場の森 こふんだい 古墳第2号	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 みのわまちおおあざ 箕輪町大字 ひがしみのわ 東箕輪1,150番地 ほか 他	20383	196	35° 55' 20"	137° 59' 50"	1998.12.01 ～ 1999.03.29	700m ²	町指定史 跡整備復 元事業に 伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
羽場の森古 墳第2号	古墳	古墳後期	円墳 横穴式石室 周溝	高坏 坏 蓋 玉類 ・勾玉 ・ガラス小玉 ・算盤玉 ・白玉 鉄器 ・直刀 ・鉄鎌 ・釘 ・轆 ・鉄地金銅張留金具	箕輪東小学校所蔵品 である既出遺物も掲 載した			

箕輪町指定史跡
羽場の森古墳第2号

平成10・11年度整備復元事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年3月31日 印刷

平成12年3月31日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会
〒399-4601 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地
TEL 0265-70-6603 FAX 0265-79-6368

印刷所 株式会社小松総合印刷
〒396-0111 長野県伊那市大字美鷹10243-4